

氏 名 古沢 ゆりあ

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1953 号

学位授与の日付 平成29年9月28日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学専攻  
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 近現代フィリピンにおける民族衣装をまとった聖母像の研究

論文審査委員 主 査 教授 園田 直子  
教授 吉田 憲司  
教授 齋藤 晃  
教授 後小路 雅弘 九州大学  
教授 岡田 裕成 大阪大学

論文の要旨

Summary (Abstract) of doctoral thesis contents

本論文は、近現代フィリピンにおける「民族衣装をまとった聖母」像を対象とし、その図像的特色と成立の背景を研究するものである。これらの像が 20 世紀初めから現代までの各時期に異なる背景の中でどのように生み出され受容されてきたか、そこに人々が何を投影し読みとっているかを明らかにする。「民族衣装」をまとった土地の女性の容貌で表された聖母の図像が、現地の文脈においていかなる必然性をもって創出されたのかを解明し、グローバル化とそれに伴うローカル化の進行するこの時代においてそれらを生み出し受容する人々のアイデンティティの変化とその社会的、文化的、歴史的な文脈を考察する。

まず、序章では、民族衣装をまとった聖母像の背景について概観する。最初に、「民族衣装」という文化的要素で自らのアイデンティティを表象させようという行為にみられるような、文化の客体化について考える。そして、聖画像崇敬における新たな聖母像の創出についてみた後、アジア各地の現地化した聖母像の事例を紹介することで、フィリピンの事例を考える上での参考とする。

続いて第一章では、フィリピンにおける聖母崇敬の歴史と図像、さらに聖画像をとりまく現在の人々の実践について述べる。植民地時代に布教とともに導入された聖母への崇敬とその像がいかに人々の心性に根付くに至ったかを、エドサ革命の折には政治を動かす原動力ともなった事例や、フィリピン各地の多くの聖母像やそれらを崇敬する人々の実践や行為から見ていき、第二章以降での個別の聖母像の事例研究の背景とする。

第二章から第五章は、それぞれの章で年代順に、民族衣装をまとった聖母像の具体的な事例を取り上げて論じる。

第二章は、独立革命期から 20 世紀前半にかけてのフィリピン独立教会における「バリンタワックの聖母」を、ナショナリズムと「母なる祖国」の象徴の観点からみていく。バリンタワックの聖母は、革命時代に革命の闘士の夢に現れて彼らを救ったという伝説をもつ。これまで具体的に特定されていなかった、伝説と像が生成した時期について、文献資料を元に検討し、イサベロ・デロスレイエスら当時の知識人の思想と 1920 年代のアメリカ支配下のナショナリズムの文脈に位置付ける。また、この像が「母なる祖国」の象徴とされることについて、図像学における「祖国」や「自由」の擬人像である女性像や、フィリピン独立教会の教義における解釈から探る。

第三章では、フィリピン近代美術の画家ガロ・オカンボによる《褐色の聖母》(1938 年)という絵画作品を取り上げ、作品の評価をめぐる自己と他者のまなざしに着目して論じる。聖母をフィリピンの農村女性として描いたこの作品は、最初の展覧会で批判を受けるが、ある宣教師の擁護によって評価は好転し、以後数年のうちに海外で複数回展示されることとなる。また、最初の展示当時の新聞記事にある作品の写真と、現存する作品が部分的に異なることを指摘し、作品の評価の変化が作品の改変(加筆)につながった可能性を論じる。これらのことから、画家の提示しようとした自文化像と、外国人を含む受容者側が求めたフィリピンらしさとの間の、アイデンティティの交渉過程が見えてくる。

第四章では、西ネグロス州シライで戦後設立されたカトリック組織バランガイ・サン・ビルヘンにおける現地化した聖母像である「バランガイの聖母」について、共同体の中で

(別紙様式 2)  
(Separate Form 2)

の受容や奇跡譚に着目して考察する。この像は、ビサヤ地方の風景を背景に現地の衣装をまとった聖母の絵画であり、ロザリオの祈りを中心とした信仰刷新運動の守護聖人である。この聖母を崇敬する人々の間では、像を中心とした宗教行事が行われ、聖母が起こしたとされる数々の奇跡が語られている。そのありさまをシライ市でのフィールドワークをもとに記述することで、信者の人々と聖画とのかかわりを描き出す。

そして、第五章では、近年登場した新たな現地化した聖母像である「フィリピンの聖母」と「フィリピンのマドンナ」を紹介する。ギマラス島のトラピスト修道院の神父が着想し島の先住民の職人に制作させた「フィリピンの聖母」の彫像と、マニラ在住のある信徒がキリストのお告げを受けて聖母崇敬を広めるべく画家に描かせた「フィリピンの聖母」の絵画、そして、マニラの聖パウロ会修道院で画家の神父が描く「フィリピンのマドンナ」からは、フィリピンの母親の理想像や、フィリピン社会の刷新への祈願というように、「母」と「国」というイメージが見えてくる。

さいごに終章では、それぞれの章の事例にみられる聖母像の現地化は、フィリピンの近代化の要素のなかで出てきたものであることを確認し、グローバル化による同化の動きとそれに反発する動きのなかでひとつの選択肢として現地化が選ばれたことを提示したい。フィリピンの民族衣装をまとった聖母像は、フィリピンの独立前夜から独立にかけての時代における国民国家形成にともなう民族アイデンティティ創出の中での文化の操作的・対抗的客体化としての視覚表象として考えることができる。外部からもたらされた、つまり元々は他者のものだったシンボルである聖母像を流用し、他者からのまなざしを受けて自文化を客体化することによって形成された表象を付与した自己像を投影したものといえる。

Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、近現代のフィリピンに現れた「民族衣装をまとった聖母」に焦点を当て、実地の作品調査や丹念なインタビューの証言収集をもとに、その個々の事例の成立の過程を人びとのアイデンティティのあり方との関係において考察したものである。

論文は、序章と終章を含む、7つの章から構成されている。

序章では、本論文で焦点化される「民族衣装」という概念自体が、近代国民国家形成の過程で文化の客体化にともなって創造されたものであることを確認したうえで、広く文化の客体化に関する先行研究が検証される。次に、植民地化以前には中国や東南アジア、植民地化以降はスペインとアメリカの影響のもとで変化してきた、フィリピン低地民の衣装の変遷がたどられる。さらに、フィリピンにおける聖母像の現地化を、20世紀に入り広くアジア全域で同時多発的におこってきた、聖母像の現地化の動向の中で位置づけるべく、中国、日本、ベトナムにおける事例が比較検討される。

続く、第1章では、フィリピンにおける布教初期の時代から現代に至るまでの聖母崇敬と聖画像の歴史的変化がたどられる。その作業を通じて、フィリピンにおいては聖母崇敬が人びとの心性に深く根差している一方、その聖母像は、時代を問わず、西洋由来の図像が大部分を占めることが確認される。そのような中で、20世紀に入り、突如として「民族衣装をまとった聖母」が登場してくることが明らかにされる。

第2章から第5章が、本論文の論考の中心をなす部分である。時代を追うかたちで、「民族衣装をまとった聖母」の具体相が論述される。

まず第2章では、フィリピンで最初の「民族衣装をまとった聖母」像と考えられる、「バリンタワックの聖母」がとり上げられる。この像は、独立運動を背景に20世紀初頭に成立したフィリピン独立教会の活動の中で制作された。古沢は、文献資料の検証をもとに、像の成立の時期を1924年以前と特定し、また、その成立を、1920年代のアメリカ支配下のフィリピンにおけるナショナリズムの動きの中に位置づけている。

第3章では、フィリピン近代美術を代表する画家とされるガロ・オカンポによる《褐色の聖母》(1938年)がとりあげられる。聖母をフィリピンの農村の女性として描いたこの作品は、発表当初は物議をかもすが、一人の宣教師の擁護によって評価が一転し、インドや日本など海外の博覧会でも展覧された。古沢は、発表当初の作品の報道写真と現在の作品の細部の差異に着目し、作品の改作の可能性を初めて指摘した。古沢によれば、その改作の時期は、海外の博覧会への出品の直前、すなわち1939年前後の可能性が高いという。古沢は、《褐色の聖母》とその改作に、アメリカ支配下のフィリピンで独立準備政府が樹立された時期における文化的アイデンティティの表出と、外部からのまなざしの介入の軌跡を読み取っている。

第4章では、1955年に原画が描かれた「バランガイの聖母」の聖画が考察の対象となる。この聖画は、ネグロス島において「バランガイ・サン・ビルヘン(聖母の村)」という名のカトリック信仰刷新運動を守護する聖母の像として描かれた。この信仰刷新運動の創始者の言葉を借りれば「フィリピン的」とされる衣裳を身につけた聖母がキリストを抱くさまを描いた聖画であるが、古沢によれば、この聖母は数々の奇跡譚をもち、それを崇敬す

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

る信徒の間では、その像容の現地的な要素はほとんど意識されていないという。崇敬対象として信仰世界に取り込まれるとき、民族的アイデンティティといった枠に回収されることなく、聖母と崇敬者個人との間に直接の結びつきが形成されることが、そこで確認されている。

第5章では、現在、新たに生み出されている聖母像の例として、「フィリピンの聖母」と「フィリピンのマドンナ」の成立の過程が、制作者への直接のインタビューを交えて記述される。そこでは、発案する人物にとってのフィリピン性が、メスティソとしてのフィリピン人でなく、先住民をイメージして措定されている例も開示され、聖母の現地化に関わるアイデンティティのあり方の多様性が描き出されている。

最後に、終章では、一連の考察から得られた知見を今一度整理したうえで、成果がまとめられている。フィリピンの場合、「民族衣装をまとった聖母」像は20世紀初頭以降にのみ見出されるとしたうえで、古沢は、それは、「フィリピンの国民国家形成に伴う民族アイデンティティ創出」のための視覚表象であったとする一方、異界から巡り来る神霊は「白人」あるいは光り輝く姿で現れるという現地の信仰を背景に、西洋人の姿かたちをした聖母像がすでにフィリピンの人びとの間で内在化され、異文化でなく、自身のアイデンティティの一部となっていること、つまりは聖母像の現地化の一様態であることを指摘する。結果として、本論文は、「民族衣装をまとった聖母」を、より広く「現地化した聖母」の文脈の中に位置づけ、「現地化した聖母」と結びつくアイデンティティの、異なる歴史的・文化的背景に応じた多様性を明らかにするものとなっている。

フィリピンの「民族衣装をまとった聖母」については、先行研究は皆無とあってよく、その点で、まずもって、本論文はパイオニア的性格を有する。また、本論文のように、フィリピンにおける聖母像について、作品の美術史的な検討と、その聖母を崇敬する民衆の動向の検討が結合されることは、これまでになかった。本論文は、民族衣装をまとった聖母について、一方ではその美術史的、図像学的背景を検討し、もう一方ではその創出と受容についてフィールドワークに基づいた考察を加えており、美術史学と文化人類学のアプローチを総合するという方法論をとることで、独自の成果を上げることに成功している。

とくに、ガロ・オカンポの《褐色の聖母》研究した第3章は本論文の白眉と言える。フィリピン近代美術史上に名高い作品を、一次資料を丹念に調査し、その展覧会歴・来歴、同時代の評価とその変遷を明らかにしたこと、また、制作されて数年のうちに大きな改変が行われた可能性を明らかにしたことは画期的な成果であり、フィリピン近代美術史研究に大きな貢献をなすものと言わなければならない。

また、第2章の「バリタワックの聖母」についての議論でも、残された資料の詳細な検討から、その制作について特定のナショナリズム運動の啓蒙的思想が関与していたことを立証し、その像の成立年代を特定しており、新たな知見をもたらしている。

さらに、第4章、第5章においては、聖母像の様式と図像の分析にとどまらず、その成立と受容のあり方が、当事者とのインタビューを中心に活写され、フィリピン化した聖母像の出現と受容を同時進行的に把握する民族誌的記述としても大きな価値を有するものとなっている。

本論文の達成は、聖母像の衣装の現地化を、グローバル化状況でのアイデンティティ構

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

築に関わる文化の客体化を通じたイメージ操作として捉えると同時に、聖母像の受容のあり方を現地調査によって明らかにすることで、そうした操作の及ばない、人びとの多様なアイデンティティの様相を明らかにしたことにある。その議論の過程では、キリスト教美術の非西洋地域への移植や、「アート」とその周縁との境界など、今日の人類学・美術史学の学際領域における先端的な課題への挑戦も試みられ、新たな研究領域を開くものともなっている。

ただし、本論文には、課題として指摘すべき点も散見される。フィリピンにおける聖母イメージの多様な広がりや「現地」の衣装については、序章で概括はなされているものの、主として個別の議論に該当するかたちで詳細な資料が提示されており、それぞれの全体像についての記述は必ずしも十分ではない。また、本論を通読すれば、フィリピンがスペイン支配からアメリカ統治、日本軍政を経てきたことは了解されるが、まとまった説明がなされないため、読者には断片的な知識しか得られない。フィリピンの歴史的概説が本論に組み込まれていれば、本論文の訴求力はより高まったと惜しまれる。

ただ、これらの点は、いずれも今後の研究の深化・展開の可能性を示唆するものであり、本論文の達成を減じるものでは毛頭ない。上述の通り、本論文は、美術史的考察と文化人類学的手法をもとに、新たな研究テーマに意欲的に挑戦し、独創的な成果を挙げたものと高く評価できる。審査委員は全員一致して、本論文を博士の学位に値すると判断した。